
脇役で不幸な俺の異世界譚

能の無い鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役で不幸な俺の異世界譚

【Nコード】

N1159J

【作者名】

能の無い鷹

【あらすじ】

不幸な青年が転生して、色々とするかもしれないお話です。主人公最強系なのでそれをしっかり確認した上でお読みください。

不幸な俺のエピローグなプロローグ（前書き）

やっちまったorz

ほかに書いてる小説があるのに。

作者のリアルラックが悪すぎてつい書いてしまった。

遅筆で不定期更新で文才なしですがお楽しみいただけたらと思います。

不幸な俺のエピローグなプロローグ

————— 思えば不幸な人生だった—————

いつかこうなるんじゃないかと思っていたのだが本当になるとはな。

自分の体は表現するのが憚られるほどにボロボロにされている。

生きているのが不思議なくらいで、後少しで死ぬ。

なぜこうなったかと言うと、庇ったからだ。勇者を。

魔王が放った一撃必殺の攻撃を庇ってこうなった。

自分でもなんでこんなことしたのかな〜と思う。

だって勇者はイケメンで才能があつてモテまくりで鈍感で、俺からしたら地獄よりもひどいところに落ちてほしい位だから。

それでも庇って助けてしまった。多分勇者の周りに居る美少女の泣き顔を見たくなかつただけだと思つが。

さっきから気づいてる人も居るかもしれないが、ここは異世界だ。

魔法があつて、魔物が居て、勇者が居て、魔王が居て。

まさしく王道な異世界だ。

そして名前からも分かる通り俺は日本からここに来た。

唐突だが、俺について少し話そう。

身長は172cmで体重は65kg。顔は平凡すぎて言うことは無い。

運動能力は中の下、勉強能力は中の上。

学校では小中高関係なく存在感が無かった。そのくせ、面倒ごとがあつたらいつも頼まれた。お礼は無し。

なんというか、不幸だった。

自動販売機は金だけ呑み込んで何もくれやしないし、不良にはすぐ目を付けられて金を巻き上げられる。

財布は1ヶ月に一回は消えるし、ゲームではラスボスの必殺技を避けようとするところでくしゃみ。

で、いつも通りいろんなことに絶望しながら寝て、起きたら異世界。

小説とかによくあるようにチートな能力とかあるのかなと思つたがそんなことは無い。

なぜかこの世界での記憶が埋め込まれており、多少武器が扱えて魔法も少し使える村人Aみたいな暮らしをしていた。

そこに勇者ご一行がたちより、成り行きで助けたらなぜか一緒に魔王を倒すことになってた。俺は一度も口を開いていない。

それどころかいつの間にか俺はしゃべることができないということになり、会話すらできない。

俺よりも強い人（ただし美少女に限る）がどんどんパーティに入ってくる為、影は薄くなる一方。

最終的に勇者を庇ってほぼ死んだ。

そして今に至る。

体が冷たくなっていくのを感じられる。

痛覚はとっくに麻痺してる。

自分の人生を振り返ってみてやはり思う。

不幸な人生だった。

せめて、次の人生はもう少しいい物にしてほしいと願う。

そろそろ限界だな。

そう思ったとき、意識が消え去った。

不幸な俺のエピローグなプロローグ（後書き）

正直こっちよりもあっち（エンディング・ワールド）の方が主なの
で更新は不定期ですがよろしくお願ひします。

こんなの書いてないであっちのを書けよなどの突っ込みはしないで
ください。

不幸の原因と不幸の元凶（前書き）

やっちまったorz

ついごっちの方を書いてしまったorz

不幸の原因と不幸の元凶

「・・・きる」

なんか声が聞こえるな。だけど俺はこの幸せ（睡眠）を逃したくないんだ。

「・・・と・きる」

うるさいな。

「いい加減起きろ！」

なんだ、いきなり何が起きた？ なぜ俺は生きてる？

「ようやく起きたな。じゃ、お前の状況について説明するぞ」

ちよ、展開早すぎだから。

「それは作者が悪い」

メタ発言自重しろよ！

「やだね。俺神だもん」

なんか今凄い重大なことを聞いた気がする。

「気がするじゃなくて事実。もう一度言つぞ、俺は神」

そつか、あれか。俺は今神を自称する痛い人に捕まってるのか。何たる不幸。

「お前そろそろ現実逃避やめろよ」

いやだ。今まであんなに不幸だったんだ。これも聞いたら不幸になるに決まってる！

「まあそうかもしれないけど。それよりお前そろそろ口で喋れよ。心読むの微妙に疲れるんだ」

そついや俺何も喋ってなかったな。ていつか心読めるのかよ！ 本当に神なのか。

「ようやく認めたな。ではとりあえずお前の状況を説明するぞ」

「わかった」

「お前は魔王の一撃必殺の技を勇者の代わりにくらった。ここまではお前も知ってるだろ？」

「まあ一応は」

「それでお前は死んだのだが、その死、というかお前の人生そのものにちよつと手違いがあつてな。実際、お前凄い不幸だっただろ」

「確かに不幸だったが手違いって何だ？」

「先に謝っておく、すいませんでした！」

おれはこれまでにここまできれいな土下座を見たことがあっただろうが、いや無い。

「つてちょっと待てよ。手違いのところなんで謝るんだ？　まるで自分のせいのように。」

「もしかして神、お前のせいで」

「うん。俺の手違いのせいでお前は不幸になった」

「ちょ元凶発見しちゃったよおい。なんてこった。」

「なあ、神って言うくらいだから殺しても死なねえだろう？　だから気が済むまで殺させてくれ」

「いやいやいや、いくら神と言っても殺し方次第では死ぬぞ。それに確かに俺が元凶だが原因はほかにある」

「へえ、死ぬんだ。まあそれはともかくさっさとその原因を教えろ」

「分かった。お前が不幸になった原因はラックの配分を間違えたからなんだが、普通は間違えることなんてあり得ないんだよ。自動でやってくれるから。俺らはそれを確認するだけだったんだが、一人明らかに能力がおかしい奴が居てな。そいつのラックを能力が低い奴、即ちお前に移そうとしたんだ」

「どっかのゲームみたいな感じだな。」

思ってたのに。あいつが消えて超焦ってる女子どもを陰で嘲笑って楽しんでたのに。あいつはその間新たなハーレムつくってあんなことやこんなことをちくしょー！ぬか喜びだったのかよ。久しぶりないことあったと思ってた俺が馬鹿だった！

「そんなお前に話がある。もう一度異世界ライフをやり直さないか？」

そんなこと言っただけはむさ苦しい男の奴隷になって後ろ「自主規制」んだろ。分かってんだよ。

「いくら何でもそれは無い。お前に復讐の機会を与えようってんだ」

「………どういことだ」

「そいつのいる世界にお前を送る。そしてグチャグチャに引っ掻き回してやれるんだよ。そいつの物語を」

「だが、今の俺でそんなことできるはずが無い」

「安心しろ。お前には俺と戦っても数年は持つほどの力を与えてやる。もちろん主人公補正は効かないぞ」

「お前の力って言うのがよくわからないんだが」

「俺は神だぞ。たかが勇者一匹に負けるはず無い。そもそも世界を作ったのが俺だ。どうだ？この話」

「分かった。その話、呑む」

「よしてきた。じゃ、ちょっとついてこい」

「りょーかい」

俺は神の後ろをついていく。周りは真っ暗だがなぜか遠くまで鮮明に見える。不思議な場所だ。

ついでに神の容姿について話そうか。一言で言つと子供だ。全身真っ黒けで目が金色。人間っぽいのが明らかに何かが違う感じがする。そんな感じた。

「ついたぞ」

目の前には大量の魔法陣。一つ一つが複雑すぎて俺には全く理解でき無い。

神が一つの魔法陣を指差して、

「この上に乗れ」

と言った。

俺が頭に？を浮かべながら乗ると突然今まで以上に光りだした。

「何だ？」

「それは転移魔法陣。乗ると定められた場所に移動する。向こうに着いたらちゃんと最強になつてゐるぞ」

まだ心の準備が……

「じゃあ、行ってこい」

その言葉に反応するかのように魔法陣が強く輝くと、俺は意識を失った。

不幸の原因と不幸の元凶（後書き）

主人公は最強になるけどもちろん不幸です。

感想評価アドバイスなどあったらください。

あと、作者はメガテンが大好きです。

不幸な俺のチート能力(前書き)

久しぶりに。

相変わらず駄文ですけどねっ！

今の状態、頭が砂浜に突き刺さってる。落ちてくるときに海と砂浜が見えたから間違いない。

とりあえず、頭を抜こうか。

「うぐぐぐぐぐ」

抜けねえ。まさか俺はこのまま異世界での一生を終えるのか？ そんなの嫌だ。

(お前の運のなさってやっぱり凄いな)

うるさい。それよりこれ、どうにかならないのか？

(なる。お前には今チートな能力がある。それを使えばどんな状況でもどうにかなる)

さすが神公認の最強能力。で、どうすればいいの？

(まず、自分は自分の能力を理解できると言え)

は？ なにそれ。

(早く言え！)

わかったよ。

『俺は俺の能力を理解できる』

っ！ なんだこれ！？ 頭ん中に変なのが入ってくる感覚がする。

……これが、俺の能力？

（それがお前の能力だ。どうだ？ 最強だろ）

確かに最強だけど、何この能力。おかしいだろ。

使い方はわかったし、頭を抜くか。息が苦しくなってきた。

『俺の頭は砂浜から何の抵抗も無く抜ける』

音がしなかったな。本当に何の抵抗も無く抜けた。

（能力について理解できたな？ じゃあこれから注意事項を話す）

注意事項？

（ああそうだ。その能力はほぼ何でも出来るが、出来ないこともほんの少し存在する）

そうなのか。で、その出来ないことというのは？

（この世界以外の世界に直接干渉すること・あまりにもチート過ぎること・自分の能力値を直接いじること・ラックに干渉すること。他にもあるが、大きいのはこの4つ）

前の3つはいい。最後のが意味不明なんだが。

『俺の能力の成長は普通の256倍』

ただしラック以外。

不幸な俺のチート能力（後書き）

意味不明ですね。

文章能力無くてごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1159j/>

脇役で不幸な俺の異世界譚

2010年10月9日02時54分発行